頼朝と慈円の和歌の贈答について

安齋　貢

はじめに

建久六年(一一九五)に交わされた頼朝と慈円の贈答は、慈円の家集である『拾玉集』巻五に収められている（新編国歌大観番号五四四一～五五一七)。

この二人の贈答に関する先行研究[注一]の多くが建久七年の政変を前提とし、政治的な背景を持つとした論となっている。だが、建久七年（一一九六）の一年前に行われたこの贈答に、九条家を排斥した政変を見据えてみることは、初めから結果としての史実を先取りした先入観を持ってみることになるのではなかろうかという疑問が起きる。久保田淳氏はこの二人の贈答について「ほとんど恋歌とみなされても当然であるような和歌を詠み交しつつ」と指摘されている[注二]。以前、そのことをふまえ、この二人の贈答歌が男同士の「恋歌」的贈答であることから、互いに反発し合う「恋歌」の技法を用いた贈答に、二人の交友を見いだすことも十分出来るのではないかと述べたことがある[注三]。また、この贈答歌群から実際の二人の関係をみる時は、少なくとも、「恋歌」的ではないもの、及び詞書からみていかなければならないことになるとも述べた。それは、贈答歌は基本的に、贈歌の内容に対し、答歌で反発の内容を返すといった手法をとるものが少なくなく、特に恋歌の贈答にはその傾向が強く現れているからである。また、答歌は贈歌に内容を先行されることからも、頼朝と慈円の「恋歌」的贈答歌の表現がつくりだす関係には、史実とは別の二人の関係が成り立っているということも考えられるのである。

以上のことをふまえ、先行研究で問題とされる五四六二番歌の詞書の解釈と五四六五番歌と五四六七番歌の「いつはり」を詠んだ贈答歌に触れ、五四七九番歌と五四八〇番歌の「いはしろの松」の贈答について再考してみたい。

一、五四六二番歌の詞書の解釈について

まず、この『拾玉集』巻五に収められた頼朝と慈円の贈答歌において、五四五九番歌から五四六四番歌まで、その各々の和歌の詠者を明らかにしておきたい。(注四)

またあれより

夏の夜はただ一こゑに郭公あかしのうらにほのめきぬらむ　五四五九

返しに

人なみにたのみかくとや時鳥あかしの浦に思ひよりける　五四六〇

副歌

あづまこそ君がすみかと思ひしに和歌のうらにもたちなれにける　五四六一

かやうのふみ、わが女のなかにきみのいかなるなかたたんなど申しつかはしたるによせて、又

君ゆゑはあやしきつまのなたつともうらみはあらじ墨染の袖　五四六二

返し

千代までもまたやちよまで和歌のうらかくすみよしな都ちかくて　五四六三

墨染といふまでしりぬころもがはきよき名ぞたつみちのくまでも　五四六四

さて、この贈答は、慈円自身の歌集であることから、慈円の和歌について自分の名を明記していないことは当然であるのだが、中にはどちらの詠であるかが判りにくくなっているものがみられることからも十分な考察が必要に思われる。

上宇都ゆりほ氏は五四六三番歌と五四六四番歌を慈円の和歌とみなし、五四六四番歌を慈円が頼朝の奥州平定を詠んだものと、また、五四六三番歌・五四六四番歌に慈円の頼朝に対する蔑視がその根底に見ることが出来ると指摘されている。(注五)だが、五四六三番歌と五四六四番歌を慈円の和歌とみることには、この贈答歌群の前後の関係をふまえると疑問が起こる。この頼朝と慈円の贈答歌については、先学の研究において、一つのまとまりとして扱われているが、贈答歌の各々の詠者が認定されているものは少ない。この和歌の贈答において、その詠者を混同したままで解釈におよぶことは、特にその贈答歌から二人の関係を見出す時、誤ったものになる可能性がある。この贈答歌群の本文には、全体を通して、頼朝歌には「前幕下」または「幕下」と記されている。また、記されていないものも詞書の「またあれより」などから特定することが出来る。だが、五四五九番歌から五四六四までの箇所で、五四六二番歌から五四六四番歌までの三首は、五四六二番歌の詞書「かやうのふみ、わが女のなかにきみのいかなるなかたたんなど申しつかはしたるによせて、又」の解釈により、各々の詠者が分かりにくくなっている。以下、この箇所を中

心に贈答歌群の詠者を明らかにしたい。

贈答歌を的確にとらえる上で、基本的なこととして、贈歌があり、それに応える返歌があることをふまえてみなければならない。そこで問題となる五四六三番歌と五四六四番歌に対応する和歌を同様の語句が用いられているかどうか（類似の和歌表現がされているかどうか）という点からみると、それぞれ五四六一番歌と五四六二番歌になると思われるのである。五四六一番歌は、詞書に「またあれより」とある頼朝の五四五九番歌に応えた慈円の五四六〇番歌の「副遣歌」であるゆえに、慈円の詠であると判る。その五四六一番歌に応えた返歌は、「和歌のうら」という同じ句が用いられていて、「あずま」に対して「都」という対応がみられる五四六三番歌となるだろう。つまり、五四六三番歌は、慈円の五四六一番歌に応えた頼朝の詠ということになる。だとすれば、五四六四番歌も同様に頼朝の詠となる。五四六二番歌と五四六四番歌に「墨染」・「名」・「たつ」など同様の詞がみられ、五四六四番歌が頼朝の詠であることから、五四六二番歌は、慈円の詠ということになるのである。まとめると、五四五九番歌は「またあれより」とあることから頼朝、五四六〇番歌は五四五九番歌の返歌であるから慈円、五四六一番歌は五四六〇番歌の副歌であるから慈円、以下の三首は考察通り、五四六二番歌は慈円、五四六三番歌と五四六四番歌が頼朝となる。

それでは、以上をふまえて、五四六二番歌の詞書「わが女のなかにきみのいかなるなかたたん」の解釈について考察していく。

福留温子氏は五四六二番歌の詞書を「二人のこのような贈答歌は、慈円の周にいる女性の間に、あなたとの関係についてどのような噂がたつのだろうかと案じて文を申し贈ったのに寄せて」[注六]と解釈されている。「きみのいかなるなかたたん」が男女の関係に見立てた慈円と頼朝の関係を意味していることから、「わがおんなのなか」の「わが」を慈円とし、「慈円が出家者でもあり、慈円の周辺にいる女性の心配というのは考えにくく、頼朝と慈円を男女と見立てていることを考えると、これは後鳥羽天皇をはじめとする宮廷貴族を意味しているととるべき」であると指摘されている。その中で氏は、「きみのいかなるなかたたん」を男女の関係に見立てた慈円と頼朝の関係から、本文を「きみのいかなるなか」と解釈されているのだが、五四六二番歌に「あやしきつまのなたつ」、また、五四六二番歌の返歌である五四六四番歌に「きよき名ぞたつ」という表現がみられることから、本文「きみのいかなるなか」は「きみのいかなる名か」もしくは「きみのいかなる名が」と解するべきではなかろうかと思われる。

このことをふまえてみていくと、五四六二番歌の詞書は「かやうのふみ、わが女のなかにきみのいかなるなかたたんなど申しつかはしたるによせて、又」とあり、一見、「によせて」の主体と、「我が女の中に君のいかなるなか立たんな

ど申しつかはしたる」と言った人物が慈円である様に思えるのだが、五四六二番歌が詞書の「いかなる名」に対して「あやしきつまのな」と応じて詠んでいることをふまえると、詞書と和歌とに内容と表現の対応がみられるので「わが女のなかにきみのいかなるなかたたん」と言った人物と五四六二番歌を詠んだ人物とは、別の人物であるということになるのではないだろうか。だとすれば「〜によせて」の動作の主体は五四六二番歌を詠んだ人物であるのだから、「申しつかはしたる」の動作の主体と別の人物と解釈するのがよいのではなかろうかと思われるのである。また、これは参考となるのだが、『拾玉集』の頼朝と慈円の贈答歌全体を通して「申しつかはす」が二例（五四五〇・五五一一）、「申しつかはしたる」の様に完了の「たり」が付属したものがこの五四六二番歌の詞書の他に①返事に消息の中になにとなきやうに書きまぜて申遣したりし（五四四一）、②其翌日自彼又申遣したるを見れば（五四四三）、③大事のきこゆることなど申遣したりしかへりごとのついでに（五四八一）の三例みられる。「申し遣したり」の動作の主体を各々みてみると、①の五四四一番歌が慈円、②の五四四三番歌が頼朝、③の五四八一番歌が慈円となっている。①の五四四一番歌と③の五四八一番歌の慈円が主体となっている場合には、完了の「たり」に過去の「し」が付属され、②の頼朝の場合には、完了の「たり」だけとなっている。本文中の動作の主体が区別されているとするならば、五四六二番歌の詞書「申しつかはしたる」は、②と同様、頼朝ということになるだろう。話を戻すと、五四六二番歌を詠んだ人物は慈円であることから、「〜によせて」の動作の主体は慈円となる。つまり、「わが女のなかにきみのいかなるなかたたん」と言った人物は頼朝で、頼朝が「申しつかはしたる（書状）」に慈円が「よせて、又」ということになるだろう。「よせて」には「ある物事の方に気持ちを傾ける」[注七]の意がある。本文「申しつかはしたるによせて、又」は、頼朝の「申しつかはしたる（書状）」に慈円が「（気持ちを）よせて、又」となる。

そして、本文の「かやうのふみ」の解釈であるが、「わが女のなかにきみのいかなるなかたたん」と言った人物が頼朝であるので、「かやうのふみ」に相当するものは、その直前の五四六〇番歌とその副歌である五四六一番歌ということになるだろう。

以上のことから五四六二番歌の詞書を解釈すると「五四六〇番歌とその副歌である五四六一番歌は、私（頼朝）の女性の心のなかに、あなた（慈円）のどの様な浮き名が立つのであろうなどと（頼朝が）申し遣わしてきた書状に、（慈円が）心をよせて、又（慈円より）」となる。だとすれば、男同士の贈答において「わがおんな」の心情を心配していることや、五四六二番歌で慈円が頼朝の「きみのいかなるなかたたん」に対して「墨染の袖」という断りを入れながら、あえて「あ

やしきつまのな」と反応していることなどをみると、この五四五九番歌から五四六四番歌までの贈答歌群は、やはり恋を強く意識した恋歌的贈答歌群であるということになるのである。

二、五四六五番歌・五四六七番歌の「いつはり」の贈答歌について

次に、五四六五番歌から五四七〇番歌までの贈答について考えたい。

又あれより
いつはりのことのはしげき世にしあれば思ふといふもまことならめや　五四六五
たのむればたのまれじとはいとはねどおもふもしらずおもはぬもみず　五四六六
かへしに
いつはりにならひけるこそあやしけれたのむ中にはよそにおもふに　五四六七
うれしくもいとはざるらんこころより人のおもふは思ひしらなん　五四六八
此返事を見て、たちかへりはしたなき口ごたへのね
たくおもふとあれば、其返事に
君となれてほかごころなきつまなればうらがへりたるねたさなるらむ　五四六九
又たちかへり返事
見なれたりたもとも袖も夏ごろもうらなきことはしらざらめやは　五四七〇

これらの贈答を福留氏は、建久六年の上洛時の政治状況、特に頼朝の娘大姫入内をふまえて、「お互いを恋人に見立てて安閑として機知の贈答歌をかわしていたとは考えにくい」とされ、五四六五番歌に「いつはりのことのは」を詠むことで、頼朝が慈円及び九条家に、大姫入内に対する裏切りを釈明しているのではないかと述べられている。また頼朝にとって「いつはりのことのはしげき世」とは虚偽に満ちた京都の貴族社会の実感であったろうと述べられている。(注八) 確かに当時の政治状況とこの五四六五番歌を結びつけて考えると「虚偽に満ちた京都の貴族社会の実感」ということも頷けるのだが、ここでは、歌語としての場合を考えてみたい。この五四六五番歌の上句「いつはりのことのはしげき世」を和歌伝統を持つ歌語として考える場合、一つは「いつはりの」と「ことのはしげき」の二句として解釈出来るもの、二つは「いつはりのことのは」と「しげき」に分解して解釈出来るものという二通りの可能性があると思われるので、以下、その点について考えていく。

頼朝の五四六五番歌は、上句に「いつはり」・「ことのはしげき」・「世」を、下句に「いつはり」に反する「まこと」を詠み込み、贈答の相手である慈円に、慈円の「思ふ」という

気持ちが「まこと」であるかを問いただした和歌である。頼朝は、この五四六五番歌を詠作するにあたり、まず、『古今集』の以下の三首を参考にしていると考えられる。

いつはりのなき世なりせばいかばかり人のことのはうれしからまし（恋歌四、七一二）

いつはりと思ふものから今さらにたがまことをか我はたのまむ（恋歌四、七一三）

世にふれば事のはしげきくれ竹のうきふしごとに鶯ぞなく（雑歌下、九五八）

特に『古今集』七一三番歌は、頼朝の五四六五番歌の「いつはり」・「思ふ」・「まこと」だけでなく、次の五四六六番歌に用いられた「たのむ」・「おもふ」も同時に詠み込んでいる点にも注目される。また、同様に『好忠集』の、

いつはりにありはすらめどわがきくにおもふといふをえこそいとはね（五二八）

にも、頼朝の五四六五番歌「いつはり」・「おもふといふ」、五四六六番歌「いとはね」と頼朝の二首に共通する表現がみられる。この『好忠集』五二八番歌は「恋十」と題する十首中の一首である。

頼朝は、以上の四首を参考として五四六五・五四六六番の二首を詠じていると思われ、特に五四六五番歌の「いつはり」と「まこと」を詠む発想は『古今集』の七一三番歌を参考としていることに注目しておきたい。

ところで、五四六五番歌の「ことのはしげき」の表現以外は、すべて恋歌を参考としている。まず、歌語「ことのはしげき」についてみてみると、『古今集』九五八番歌の表現には、風聞や批判の意味があるのだが、[注九]『隆信集』の歌、

近衛院御時のないしに、ひさしくたいめんきこえで、たまたま大原に入りたりしにも、いそぐこと有りて、そのすみかははるかなるおくの山ざととききてえまからざりしかば、帰るとて、ゆいしん房につたへて申しおくりし

としつもることのはしげきみ山べを猶よそながら帰りぬるかな（八五一）（傍線は筆者）

かへし

尋ぬべき草のとざしにあらずともおなじやまぢをなどかよきけん（八五二）

の様に、「何度も会うと言って何年も会っていない」状況を詠む例もある。次に、「いつはりのことのは」という表現についてみてみると、『林葉集』に、

詞和不会恋同

玉づさをうれしうれしとまきもてば皆偽りのことのはかさは（八二七）

があり、また、「いつはり」と「ことのは」を詠んだものをみてみると、『金葉集』に、

いかでかとおもふ人のさもあらぬさきにさぞなど人

の申しければ

恋ひわぶるきみにあふてふことのははいつはりさへぞうれしかりける（恋部下四六〇）

があり、『経家集』に、

右大臣家百首に、遇不逢恋（五七番歌詞書）

よもすがらきみがちぎりしことのははさていつはりになりぞはてぬる（五九）

があり、『長秋詠藻』の贈答歌に、

又女につかはしける

恋しともいはばおろかに成りぬべし心を見することのはもがな（三二五）

返し

こひしてふいつはりいかにつらからん心を見することのはならば（三二六）

などがある。以上の四首は『林葉集』八二七番歌が「詞和不会恋同（同は歌林苑）」の題、『金葉集』四六〇番歌が「あふてふことのは」、『経家集』五九番歌が「遇不逢恋」の題と「逢うと言うことのは」に対する「いつはり」を詠み、『長秋詠藻』三二六番歌が「こひしてふいつはり」と恋の贈答として「いつはり」が詠まれている。これらの例をみてみると、頼朝の五四六五番歌の上句は、「会うと言って会っていない」という意と同様な意として詠まれたものであろうと考えられる。

そこで注目したいことは、五四六五番歌の頼朝の「いつはり」が、贈答歌であることから、それに応えた五四六七番歌の慈円の「いつはり」と共通する意味合いを持つことである。慈円の五四六七番歌は、頼朝の慈円の「思ふ」を問う和歌の「いつはり」に対して「たのむ」を詠んで答えている。慈円歌は『待賢門院堀河集』の、

たのむる

いつはりにならはざりせば行すゑのたのむることになぐさみなまし（一〇七）

を先行歌としている様で、慈円の五四六七番歌の上句「いつはりにならひ」と類する表現や、「いつはり」と「たのむる」を詠んでいることも共通している。

「いつはり」と「たのむ」を詠んだものに、先に挙げた様に『古今集』七一三番歌もあるのだが、『古今集』六一四番歌の躬恒歌、

たのめつつあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなむ（恋歌三、六一四）

もある。この躬恒歌は恋歌であり、そこに詠まれている「いつはり」とは「たのめつつあはで年ふる」ことである。この躬恒歌は、『古今集』に加え、『後撰集』恋五、九六七番歌と勅撰集に二度入集している珍しい歌である。あるいは、人口に膾炙した和歌であったのであろうか。慈円も「いつはり」と「たのむ」を詠み込む上で、この躬恒歌を意識していたこ

とは十分に考えられる。また、先に挙げた「いつはり」に関する例をみても、「いつはり」は、躬恒歌の「たのめつつあはで年ふる」に通じていると思われる。つまり、恋歌として詠まれる「いつはり」とは、単なる「嘘」ではなく「何度も頼みにさせておきながら、逢わないままに年を過ごす」(注十)という結果としての「嘘」を意味しているのではなかろうかということである。それは、抽象的な「嘘」全般を指すのではなく、「逢う」という言葉及び約束が「嘘」となるという限定された具体的な意味を指している様に思えるのである。以上をふまえると、この頼朝と慈円の「いつはり」の贈答もこの様な恋の贈答であった可能性があると思われる。慈円には、この五四六七番歌の他に「いつはり」と「たのむ」を詠んだ和歌がある。

摂政太政大臣家百首歌合に、契恋のこころを　前大僧正慈円

ただたのめたとへば人のいつはりをかさねてこそは又もうらみめ

(『新古今集』恋歌三・一二三三、『拾玉集』一六二二番歌)

この『新古今集』一二二三番歌は、「いつはり」と「たのむ」を詠みながら「契恋のこころ」を詠っている。このことは、少なくとも慈円の意識の中に「いつはり」と「たのむ」という歌語が恋歌を詠う時に用いる語であるという認識があったことも証明しているのではないか。慈円の和歌の中で「いつはり」と「たのむ」を共に詠んだものは、この『新古今集』一二二三番歌と頼朝に応えた五四六七番歌の二首の他にはみられない。そのことからも、五四六七番歌に詠まれた「いつはり」に『新古今集』一二二三番歌同様、恋歌を詠う時に用いる歌語という認識が慈円にあったことは十分考えられるのである。また、慈円の返歌であるこの五四六七・五四六八番歌を頼朝が「はしたなき口ごたへをねたく」思うと五四六九番歌の詞書で言っていることもこの贈答が恋の贈答であることを物語っているのではないか。「はしたなき」は『金葉集』五八六番歌の詞書に「をとこの心かはりてつねにはしたなくみえければ」などとある様に、素っ気ないという意を持つ。(注十一)「はしたなき口ごたへをねたく」を慈円の心変わりした様な素っ気ない口答えに頼朝は嫉妬していると解すれば、この頼朝と慈円の「いつはり」の贈答が恋歌としての贈答であることと否定はできないと思われるのである。

三、「いはしろの松」の贈答について

最後に「いはしろの松」の贈答歌についてみてみたい。頼朝と慈円の贈答で、恋歌的贈答歌に属さないものとして、「いはしろの松」を詠んだ贈答歌がある(五四七九番歌と五四八〇番歌)。

これより又そふ

たまづさを松につけてもいは代の結ぶちぎりをおもひしるかな　五四七九

かへし

君とわれとむすびてけりないはしろの松と友にて久し久しと　五四八〇

はじめにも述べたが、この贈答歌群から実際の二人の関係をみる時は、少なくとも「恋歌」的ではないもの、及び詞書からみていかなければならないと思われる。ここで、慈円と頼朝は互いに「いはしろの松」を詠んでいるのだが、五四八〇番歌で頼朝は「いはしろの松」に加え、「友」を詠んでいる。以前、この贈答を「交友の贈答歌」と分類をしたことがあるのだが、(注十二)それは和歌の贈答において応える場合、内容及び表現が贈歌に先行されるということがあり、頼朝が返歌において「友」という表現を新たに提示して詠み込んでいることに注目したからである。

それでは、この頼朝の「いはしろの松」に「友」を詠み込む発想はどこからきたのであろうか。それは、『和漢朗詠集』の部立の一つである「交友」からの影響をみることが出来そうである。

きみとわれいかなることをちぎりけむむかしのよこそしらまほしけれ（七三九）

たれをかもしるひとにせむたかさごのまつもむかしのともならなくに（七四〇）

この『和漢朗詠集』の二首は、交友の意を持つ和歌として挙げられている。七三九番歌の初句「きみとわれ」という表現は頼朝歌と共通している。また、七四〇番歌には、ここでは「高砂の松」であるのだが、「松」及び「友」が詠み込まれている。『和漢朗詠集』の他に交友の意を持つ和歌として「松」を詠み込むものは、『新撰朗詠集』の「交友」の部立に「松風」を詠み込んだものがみられる。

語はむ人こそなけれ山里はをのが松風そより外には（六九〇）

「松」を詠む意は「往古を熟知し、老人知友の木と目され、千年の樹齢と常磐の緑を鑽仰するところに」(注十三)あると言う。交友の和歌を詠む上で「松」を詠むという伝統があったことを頼朝は会得していて、「交友」の気持ちを表すために、「いはしろの松」を詠み込んでいるのではないか。さらに『和漢朗詠集』の七三九番歌を参考にして共通する初句「君とわれ」を詠み込んだのではなかろうか。

この贈答の歌意は慈円の五四七九番歌が「あなたからの手紙が来るのを待つことにつけても、あなたとむすんだ岩代の結びの松の契り（約束）の心を思い知るものだなあ」となり、それに答えた頼朝の五四八〇番歌が「あなたとわたしは、きっと岩代の松の契りと末永い交友の契りを結んだことですね」となる。

次に、この贈答は慈円から「いはしろの松」を詠み込んだ

歌を頼朝に贈っているのだが、それではなぜ、慈円は「いはしろの松」を詠んだのであろうか。それは、五四七九番歌の歌意をふまえると、下句「結ぶちぎりをおもひしるかな」が慈円自身の実感として「岩代の結びの松の契り」を「思い知る」と詠まれているのではないかと思われることから、頼朝と慈円は互いに「いはしろの松」を詠んだ五四七九番歌と五四八〇番歌の贈答歌を交わす前の段階で、互いの交友と共に「いはしろの松の契り」に類する何か、いわゆる約束の様なものを結んでいたのではなかろうかと想像される。

「いはしろの松」は、『万葉集』巻二、有間皇子歌に由来する。

いはしろのはままつがえをひきむすびまさきくあらばまたかへりみむ（一四一）

この和歌は謀反の罪に問われた有間皇子が、詮議のため護送される途次、岩代の浜の松の枝を行く末の無事を祈って結び、その祈りが叶ったならば再び戻ってくるという願いを込めた気持を詠んだものである。以後、「いはしろの松」はこの有間皇子の故事をふまえ和歌に詠まれている。(注十四) この「いわしろの松」について『俊頼髄脳』では、

結び松の心はたむけといへる同じなり。松の葉をむすびて、これがとけざらむさきにかへりこむとちかひて結ぶなり。さてまさしくあらばとよむなり(注十五)

と記されている。『俊頼髄脳』によれば、「結び松の心」は、手向けであり、同時に、松の葉を結んでそれが解けてしまうまでに帰るという意志を誓うことと言う。(注十六) 以上の「いはしろの松」にまつわる故事をふまえ、頼朝と慈円の関係に照らしてみると、「手向け」として「いわしろの松」を詠んだのではなかろうかということになるだろう。手向けには、①神仏に幣など供え物をすること、②旅立つ人へのはなむけ、③道の神に旅中の安全を祈るところなどの意がある。(注十七) 慈円は鎌倉に下る頼朝へのはなむけ及び道中の安全に加え、頼朝の行く末を祈る意をもって「いはしろの松」を詠んだのであろう。同時に、松の葉を結んで、結んだ松が解けてしまうまでに帰るという意志、これは、先の「いはしろの松の契り」に類する何か、つまり、都に居る慈円は鎌倉に下る頼朝と、頼朝が再び都に戻ってくるという契りを結んでいたのではなかろうかということが考えられる。このことをふまえ、二人の贈答歌全体の詞書をみてみると、重要なこととして、以下の様な詞書に注目したい。

①又六波羅の家にてもあひっつちぎりなどあさからず（五四四一）

②又かまくらへかへりくだりなんとすとききて、京にすまはれんこそ世のためもよからめ（五四四七）

③あれよりいはぬ日のありしかば、これより（五四七三）

④十八日ごとに三千遍のをがみをするよしかたりき、ゆゆしきつとめなり、たぐひなき事なり（五五〇三）

慈円の頼朝に対する心情は、①頼朝との契りなど浅からずという関係、②頼朝に京都（都）に住んでほしいという願い、③頼朝との贈答における慈円の積極的な態度、④頼朝のために十八日ごとに三千遍の礼拝をすること、またその礼拝が類なき立派な勤めであることという四点になる。二人の「いはしろの松」を詠んだ贈答歌は③と④の間で交わされている。これらを時間を追ってみていくと、二人の贈答歌には慈円の頼朝に都に住んでほしいという思いが根底にあり（②）、慈円の願いである頼朝が再び都に戻るという契りを結び、その証として「いはしろの松」を詠んだ贈答を交わし、「いはしろの松」がもつ「手向け」の意識から頼朝のために十八日ごとに三千遍の礼拝をし（④）、全部で七十四首にも及ぶ贈答を、別れの直前まで交わし、この様な二人の関係を指して「契りなど浅からず」（①）と記したという見方ができる。つまり、この「いはしろの松」の贈答は、頼朝と慈円の交友と約束及び互いの手向けを詠んだものでないだろうか。だとすれば、この「いはしろの松」の贈答歌は、二人の贈答において重要な位置を占めるものとなるだろう。④を詞書にもつ歌群において、五五〇四番歌とそれに答えた五五〇七番歌は無論のこと、五五〇五番歌とそれに答えた五五〇八番歌及び五五〇九番歌から五五一二番歌の石清水詠も「いはしろの松」の「手向け」という意を根底として、互いの行く末を願うものとなり、互いの行く末を願い合う交友の関係を示している可能性があることにもなるだろう。

頼朝が再び都に戻ってくるという契りが慈円の願いであったことは、五四四七番歌の詞書や二人の贈答歌で頼朝に都に住んでほしいという慈円の思いが根底にある贈答を何度も交わしていることから考えられ、頼朝も贈答を交わすうちに、都には住めないまでも再々度の上洛を慈円と約束するに至るといったことも十分に考えられる。

また、この「いはしろの松」の贈答歌に、今まで述べてきた、頼朝が再び都に戻ってくるという契りを結んでいたことが込められているのならば、『愚管抄』巻六、建久十年正月の記事にみられる、頼朝がその死の直前に兼実に送った書状「今年必ズシツカニノボリテ世ノ事サタセント思ヒタリケリ、万ノ事存ノ外ニ」（注十八）に対する慈円の期待は多大なものであったろう。

注

注一　頼朝と慈円の贈答に関する主要な先行研究を挙げると以下の通りである。

多賀宗隼氏『慈圓の研究』（吉川弘文館、昭和五十五年二月）

久保田淳氏「頼朝と和歌」（文学、第五十六巻一号、昭和六十三年一月）

川平ひとし氏「和歌と政治」（国文学、第三十二巻五号、昭和六十二年四月号）

上宇都ゆりほ氏「慈円・頼朝贈答歌についての一考察」（お茶の水女子大学人間文化研究年報、第十八号、平成七年三月）

福留温子氏「頼朝の和歌」（鎌倉女子大学紀要、第七号、平成十二年三月）

鈴木正道氏「文学に現れた『壷の石碑』（三）」（山形県立米沢女子短期大学紀要、第十一号、昭和五十一年十二月）。後に『慈円研究序説』（桜楓社、平成五年）に収載。

丸山正道氏「慈円と頼朝」（弘前大学国語国文学、第二十三号、平成十四年四月）

注二　注一、久保田氏論文。

注三　拙稿「建久六年における頼朝と慈円の和歌の贈答について」（日本文学論集、第二六号、平成十四年三月）において、二人の関係について述べたことがある。

注四　『拾玉集』の本文は『新編国歌大観』による。以下和歌の引用は全て『新編国歌大観』による。

注五　注一、上宇都氏論文。

上宇都ゆりほ氏「慈円と八幡信仰」（国文、第八十五号、平成八年七月）

注六　注一、福留氏論文。

注七　『日本国語大辞典』「よす」参照

注八　注六に同じ。

福留氏の他に頼朝の五四六五番歌を解釈されているものを挙げる。

岩佐美代子氏『玉葉和歌集全評釈』下巻（笠間書院、平成八年九月）

偽りの言葉ばかり充満しているこの世の中ですから、あなたが「信頼する」と言って下さるのも、さあほんとうですかどうですかね。

注一、丸山氏論文。

歌の上句「偽りのことのはしげき世にしあれば」の表現は、作者頼朝の偽らざる心境の吐露、とみたい。下句「思ふといふも誠ならぬや」の表現は、武士として、乱世にいきてきた人としては、当然と言えば当然の気持ちから発せられた心情だと思われる。

注九　『歌ことば歌枕大辞典』「ことのは」参照

注十　片桐洋一氏『古今和歌集全評釈』（講談社、平成十年二月）

注十一　『日本国語大辞典』「はしたなし」参照

注十二　注三に同じ。

注十三　『和歌大辞典』

注十四　注九に同じ。「岩代」「松」「結び松」参照

注十五　『俊頼髄脳』の本文は日本歌学大系による。

注十六　『俊頼髄脳』日本古典文学全集

注十七　『日本国語大辞典』「たむけ」

注十八　『愚官抄』の本文は日本古典文学大系による。